

初期中国仏教における小乗仏教の受容について

——吉蔵の正量部に対する解釈を中心として——

崔 恩 英

1. はじめに

周知の如く、中国ではインドでの成立順序を踏まえずに小乗と大乘の文献がほぼ同時に漢訳され、その結果、仏教受容の初期段階から大乘仏教が中心となる傾向にあったが、小乗仏教がどのように受容されたかということも、また中国仏教思想史における一つの課題であると言えよう。初期中国仏教において小乗文献の中で律に関するものと阿毘達磨の論書がある程度将来されていたが、中国の仏教界にも部派の思想的相違に対する意識が生まれたのは、真諦が『部執異論』を訳出後であると考えられる。

本稿は、部派の相違を区別しようとする意識の萌芽が著作の中に現われている中国三論宗の嘉祥大師吉蔵（549-623）の正量部に関する理解を通し、初期中国仏教における小乗仏教受容の一面を考察することを目的とするものである。小乗犢子部から分派した4派のひとつである正量部には漢訳により『三弥底部論』と『律二十二明了論』が残されている。これらの文献と正量部の主張に関する吉蔵の見解が表明される部分とを検討しつつ、以下に考察を試みたい。

2. 『三弥底部論』と『律二十二明了論』

現在、正量部の思想を直接的に伝える文献として現存するのは、漢訳の『三弥底部論』と『律二十二明了論』（以下『明了論』）のみである¹⁾。

このうち『三弥底部論』は秦代の失訳本とされるが²⁾、その名称「三弥底部論 (Sammitiya)」は、そもそも「正量部の論」という意味である。その根本的な教義を伝える本書の内容は、人が死んで輪廻する際、その輪廻の主体とも言いうる補特伽羅 (pudgala) と中有に関するものが主であることが特徴である³⁾。

一方、真諦が567年に訳出した『明了論』は、論の冒頭に撰述者として正量部の仏陀多羅多法師の名が見られる。

(50) 初期中国仏教における小乗仏教の受容について (崔)

管見の限り、中国において正量部について言及する早い例は吉蔵の『法華義疏』と『中観論疏』である。ただし、『法華義疏』には「正量部云。第五不可説者、即是十四無記也。」(T34, p.559c) の一か所で言及されるのみであるため、以下の考察では引用が多数見られる『中観論疏』を中心に検討してゆきたい。

3. 吉蔵の正量部学説に対する理解と誤解 — 「不失法」を中心として

『中観論疏』はその名の通り『中論』の注釈書で⁴⁾、先行研究により吉蔵の608年頃の著作と見られる⁵⁾。吉蔵はこの『中観論疏』の中で、真谛三蔵の説として次のように述べている。

【引用1】 真谛三蔵出、正量部明不失法、是功用常。待果起方滅。中間無念念滅。(T42, p.119a)

また、『明了論』に依拠して正量部の二つの肝心な法を不失法と至得であるとすする有人の説を特に批判を加えることなく、次のように要約する。

【引用2】 依正量部義。正量本是律學。佛滅後三百年中從犢子部出、辨不失法、體は無記。明了論是覺護法師造。而依正量部義。論云、正量部有二種、一至得、二不失法。(T42, p.119c)

しかし、『明了論』は律に関する内容が主であり、現存する文献を見る限り、不失法や至得に関する内容は皆無である。したがって吉蔵が『中観論疏』の正量部説として言及する二つの概念の根拠がどこに求められるのかが問題となる。

そもそも不失法⁶⁾は、注釈対象である『中論』「観業品」の偈頌に「不失法如券、業如負債物、此性則無記、分別有四種」(T30, p.22c)と現れる語である。不失法は業と同様なものでわない、ここに見られる不失法に相当する梵本は *āvipraṇāśa* で「消滅されない」という意味である⁷⁾。

さて、『中論』の偈頌に対する青目の注釈では、無記や業について「阿毘曇中廣説」(T30, p.22c)として詳細を譲るが、不失法については具体的な部派は言及されていない。これに対し、唐代に翻訳された『般若灯論釈』では、正量部による「阿含経中、仏如是説、有不失法」(T30, p.101c26)という説を引き、不失法と正量部との関係を窺わせる⁸⁾。

吉蔵はその注釈の中で不失法と関連するものすべてを正量部説とし、数度にわたり具体的に解釈を加えている。その一つの例をみてみよう。

【引用3】 不失法、但善惡有之、外法則無。又但是自性無記。又待果起方滅。若是至得逐法通三性、通内外法皆有。果未起時、若懺悔則至得便滅。而不失法、雖懺悔罪不滅、要須更待果起方滅也。始終有五部、一薩婆多通三性。餘四部皆無記。一佛陀人、二曇無徳、三正量、四攝論、並は無記。此四所以同は無記者、彼深有所以、善惡業自感報耳。此持

業法不感報，故は無記。（T42, p.119c）

【引用3】は【引用2】の直後に続く文であり、いずれも先に引用した『中論』の不失法に関する議論を注釈した部分である。これらの文脈から吉蔵が理解した正量部説を整理すると次のようになる。

- ①正量部の律書である『明了論』には、不失法と至得が正量部説だとされている。
- ②不失法は無記法である。
- ③不失法は果が起るのを待って（＝至得）、やがて消滅する。
- ④薩婆多（有部）は善、悪、無記の三性を統合して不失法とするが、正量部は無記だけが不失法である。善業と悪業の果報はおのずから感得するのである。

まず問題となるのは①である。現存する『明了論』の内容はすべて律学にかかわる解説であり、不失法や至得に関する言及は見られない。吉蔵が現存本と別の系統のテキストを参照した可能性もあるが、『明了論』全体の内容から見て、業の依持と消滅に関連する不失法と至得の理論的な説明はそもそも論の中になかった可能性が高い。また、部派の違いを説く『部執異論』にもこのような思想的特徴を明示する内容はない。

そして②に関連して、別の箇所では以下のように説いている。

【引用4】無記通大小。正量是小乗。阿梨耶不失法是大乘。阿梨耶翻為無沒識。無是不之異名。沒是失之別目故。梨耶猶是不失法。又梨耶體是果報無記，能持一切善惡種子。正是今外人義。（T42, p.119a）

ここでは、無記である不失法は大小乗に通じるものであるが、大乘の不失法は阿梨耶不失法であり、梨耶は善悪業の種子を依持したものは外人の義であると吉蔵は解釈している。これは、吉蔵に独自の解釈方法と言えよう。このように吉蔵は不失法と阿梨耶識の役割、または体性が近似したものと理解していたことがわかる。

4. 『三弥底部論』の業説に関する検討 — 吉蔵解釈の妥当性

『中観論疏』以外の文献も含め吉蔵の著作には『三弥底部論』の名を挙げて言及する例が全くみられない。よって、吉蔵が『三弥底部論』の存在を知っていたとは考えにくい。ここでは、吉蔵の不失法に対する理解を検討するために、他の文献における不失法の意義を介在することにより、『三弥底部論』からみる吉蔵説の妥当性を検討していきたい。

『三弥底部論』の本文のなかにある業の依持の体に当たる言葉は不失法ではな

(52) 初期中国仏教における小乗仏教の受容について (崔)

く人となっており、これは阿毘達磨仏教にも見られる補特伽羅を指している。では、吉蔵が正量部の不失法というものが、「人」や補特伽羅を指し、そしてその性格も同じであるのかを無記と功用常というキーワードから検討していきたい。

まず、不失法は無記性に該当するという内容は、『三弥底部論』においても「是人臨欲死時、成無記心」(T32, p.462a) という文言より確認される。

次に、人は不失法と同じく功用常であるのかという点である。前に検討した【引用 1】で吉蔵は真諦の説を引用して功用常を用いているが、真諦の文献にこのような用語は見当たらない。『三弥底部論』にも功用常という単語が見られないが、人の常、無常の見解と関係する文脈が見られ、そこでは我に関する様々な部派の見解を紹介しながら、我にあたる自分たちの人について常、無常を語るができないという正量部の立場を明示している⁹⁾。人を無常だとするならば業と果報の法則が壊れるが、しかし人を常だとするのも無理である。『中論』の青目釈では龍樹が不失法に対して不断不常であることを論破しなかったと吉蔵は注釈したことを考慮すると¹⁰⁾、功用常という用語はこのような意味をもって吉蔵が独自に表れたものだと考えることができる。

功用は、「自然に起きるのではなく、何か不自然なものに適應する」という語義に基づくものである。このような状態としての常であるということが「功用常」だとするこの用語は、極めて中国的な思惟の表現と言えよう。「至得」の内容を考慮すると、人を功用常と言うことができ、吉蔵が不失法を功用常だと述べたことは、それに符合した理解であると考えられる。

では、吉蔵はどのような文献に基づきこのような説をまとめたのであろうか。その可能性として考えられる文献の一つに、真諦訳『随相論』がある。『随相論』は唯識の十大論師の一人である徳慧 (Guṇamati) が著した『俱舍論』の注釈書である。実際には現存する『随相論』は徳慧が著したものではなく、『随相論』の中から『俱舍論』の後の部分にある四諦十六行相に対して真諦が注釈した『随相論中十六諦疏』二巻であると考えられている¹¹⁾。

この『随相論』では、不失法と同様の意味として無失法という語が混用されている点¹²⁾が留意されるが、この無失法も真諦訳以外の漢訳文献にはほとんど用いられない語である。以下に引用する部分は、その無失法について説く文脈であるが、【引用 1】や【引用 3】に見た吉蔵の不失法の解釈にはこれと極めて近い表現が多いことは一目瞭然である。

【引用 6】若正量部戒善，生此善業，與無失法俱生。其不說有業能業，體生即謝滅，無失法不滅攝業果令不失。無失法非念念滅法，是待時滅法。其有暫住義，待果生時其體方謝。

吉蔵はもともと幼少のころより真諦三蔵と深い因縁があり，訳の引用が多い点を鑑みて，【引用 1】にも既に真諦の名が挙がっているとおり，この『随相論』の内容も吉蔵が正量部を理解する際に大変重要な参考になったと推測されよう¹³⁾。つまり，吉蔵が正量部説とする不失法という用語を正量部説と関連付けるという解釈は直接的には真諦の見解を受容した可能性が高いのである。しかし，先にも指摘したように，阿梨耶識と不失法を関連づけてすべて無記であると説明するのは，業の依持の体と関連づけて小乗正量部説と大乘唯識学を連続して考える独特な解釈であるように，全てが真諦説を継承しているわけではなく，吉蔵独自の解釈も含まれていると見ることができよう。

5. おわりに —今後の課題として—

『中論』の偈頌に現われる不失法という語に対する解釈の中で，吉蔵は正量部の説について数度言及している。吉蔵在世時には既に正量部の文献である『明了論』や『三弥底部論』が訳出されていたが，考察の結果，吉蔵の理解はこれらの文献から直接得た知識ではなく，真諦の説，より具体的に言えば『随相論』に依拠した可能性が高いことが明らかとなった。

現存する文献の他にも当時数多くの文献があり，或いは初期中国仏教学者がそれら散逸文献を参照した可能性も否定できない。したがって，真諦またそれを継承した吉蔵の理解する正量部説の源泉がどこであるのかは，注目すべき問題として残る。また吉蔵に独自の解釈については，中国仏教思想史における意義をより深く検討する必要がある。特に券と関連して有部と正量部，他の仏教思想を比較解釈する吉蔵の独創性における点は今後の課題としたい。

-
- 1) 間接的な資料としてもパーリ仏典の『論事』(Kathāvatthu) や，上述の『部執異論』，玄奘による異訳である『異部宗輪論』しか残されておらず，正量部の思想に関する情報は極めて少ない状況にある。『大唐西域記』には玄奘が「三彌底部經律論一十五部」(T51, p.946c17)，つまり正量部の經論 15 部を持ち帰ったと記されることから，正量部は 7 世紀までインド地域に存立していた小乗部派であったと推測される。
 - 2) 『出三蔵記集』には記録がなく，隋の費長房『歷代三宝紀』(597) の小乗阿毘曇失訳目録において，「三弥底論四卷」(T49, p.120a8) と記載されるのが初出である。その内容は以後の經録に踏襲されるが，その構成は三卷，または四卷と若干異なり，『開元釈教録』では名称を「三弥底部論」(T55, p.518c; 621b; 696a) としている。

(54) 初期中国仏教における小乗仏教の受容について (崔)

- 3) これに関連する現代の研究成果として代表的なものに国訳一切経毘曇部6『三弥底部論』(大蔵出版社, 1934), 加治洋一「『三弥底部論』の研究—我に関する章」(『仏教学セミナー』42, 1985年; 46, 1987年; 51, 1990年)と同「『三弥底部論』解読研究—中有の存在に関する議論」(『大谷学報』254, 1987年; 256, 1988年), 前田至成「三弥底部 (Sammitiya) の業思想」(『相愛女子大学・相愛女子短期大学研究論集 音楽学部篇』28, 1981)がある。
- 4) 部派仏教の内用における理解として青目の注釈『中論』の重要性に対して言及する論文には吉津宜英「中国仏教における大乘と小乗」(『駒沢大学仏教学部論集』1, 1971, p.135)と註3前田前掲論文 (p.121)がある。
- 5) 平井俊榮『中国般若思想史の研究—吉蔵と三論学派』(春秋社, 1976年)のp.368を参照。
- 6) 不失法は『成業論』では *tshud mi za ba* (消滅されないもの)であり, 玄奘の『大乘成業論』に不失壊に相当する。註3前田前掲論文 (p.130)に詳しい。
- 7) 三枝充恵訳注『中論—縁起・空・中の思想(中)』(第三文明社, 1984年)では不失を「業の相続において業が消えてもなお失われない別法で輪廻の主体〔の原理〕」と訳す (p.451)。
- 8) 以上のインド仏教における展開は那須良彦「有部の不失法因と正量部の不失—『中論』第17章所述の「不失」に対する観誓の解釈—」(『印度学仏教学研究』53-1, 2004年)に詳しい。
- 9) 『三弥底部論』「如諸部前所説, 人是常, 無本故。如是我等今説…若人無常者, 衆生輪轉所作善惡業壞…人無常故。如是。」(T32, pp. 465c-466a)。
- 10) 『中観論疏』「問外有偈立, 龍樹何故無偈破, 答有二義。一者顯外人雖復重救終不離斷常。故論主不答之。如此不答即是答也。」(T42, p.121b27)。
- 11) 『仏書解説大辞典』巻6, p.279を参照。
- 12) 不失法と同様の意味として無失法, 不失壊を比較するについては, 註3前田前掲論文 (pp.129-130)に詳しい。
- 13) 『大唐西域記』に依據しながら正量部は *ujjain* を中心として活動した (T51, p.935c)。真諦の *ujjain* 出身を考慮すると真諦の正量部についての理解は比較的の高いと推測されよう。

(2007年韓国政府教育科学技術部の財源による韓国学術振興財団の支援 KRF-2007-361-AM0046 による研究成果の一部)

〈キーワード〉 正量部, 『三弥底部論』, 吉蔵, 『随相論』, 不失法, 功用常
(金剛大学校仏教文化研究所 HK 教授, 哲学博士)